

定義と伝統と 変な寿司 矢部雅之

同僚二人とニューヨークでタクシーに乗っていた時のこと。アメリカで見かける変な寿司についての取材を進めていた日本人の同僚が、その話を始めた。あそこの寿司屋はネタに甘い菓子を使っていた、とか、あそこの巻物にはフライドチキンや金粉が入っている、とか。面白おかしく説明しながら「あんなのは寿司じゃない」と失笑するのだ。彼の話を聞きながら、「来るぞ来るぞ」と私は内心思っていた。すると案の定、助手席に座っていたアメリカ人の同僚が振り返った。「日本人は、あんなのスシじゃない、とよく言うけど、じゃあ一体何がスシ?」

やっぱり来た。なぜそう思ったかというところ、彼が、人種差別主義者や自民族中心主義者など、異文化に対して偏狭な態度をとる人を軽蔑する、リベラルな価値観の持ち主だったからだ。そんな彼が、日本人同僚の失笑の中の、「日本人以外の連中なんかは寿司がわかるものか」的なニュアンスに反発しない訳がない。

「スシの定義って何?」「うーん。酢飯の上に生の魚が乗ってて……」「ウナギやアナゴは火を通すでしょう?」「生でなくてもいいけど、魚が乗ってて……」「タコやウニは魚?」「魚以外でも、シーフードが乗ってれば……」「じゃあカッパ巻きはスシじゃない?」「まあ確かに……でも、甘い物を使ったりするのはやっぱり寿司とは言えないな」「でも、玉子焼きは甘くない?」「うむむ……」

日本人同僚が困ったような声を出すと、アメリカ人同僚は愉快

そうに笑い、次に、私を振り返った。「どう思う?」

微妙な話題を振られちゃったな……日本人同僚の話の中に若干の文化的狭量さがあつたのは判る。だが異形の寿司に対する彼の当惑も同じ日本人として理解できなくはない。困った私は咄嗟に、語呂合わせに走っていた。

「何がスシかというのは、君には定義 (definition) の問題かもしれないけど、僕らには伝統 (tradition) の問題なんだよ……」

すると、我ながらスベリ気味と思われたこの語呂合わせにアメリカ人同僚は妙に反応した。「なるほど……、definition じゃなくて tradition……、うまいこと言うね」と言うと、スシの定義の話で日本人同僚を困らせるのをやめたのだ。

何の説明にもなっていないただの言葉遊びに何故、あんなにあつさり彼が納得したのかは正直よく解らない。ただ今回の件で、「伝統」と「定義」が実は、思わぬ対立関係にあることに私は気づかされたような気がした。

自分にとつては当然のように存在していて、定義付けや存在価値の説明など全く不要と思われるような、自分の属する文化の「伝統」も、異文化の視点から見れば、「定義」付けがいちいち必要な未知の異物でしかない。そして、「グローバルゼーション」の時代にあつて自文化の伝統を次代につないでゆくためには、空気のように自分の周囲を取り巻く「伝統」というものを、自分から一度切り離して相対化し、その定義と価値とを異文化の人にも明快に理解させられるような説明の言葉を、予め準備しておく必要があるのかもしれない……たかが変な寿司の話から大袈裟かもしれないのだが、そんなことを思った。